

Harold E. Palmer の言語観

興 津 達 朗

Harold E. Palmer's Views of Language

Tatsuro OKITSU

ま え が き

Harold E. Palmer (1877-1949) はわが国の英語教育史上、伝統的な Translation Method にかわる Oral Method の提唱者として、またこの新教授法の普及、実践にかかわりのある文部省の英語教授研究所 (The Institute for Research in English Teaching, 略称 IRET) の所長として一般によく知られており、戦前のわが国の英語教育における偉大な貢献者と言える。しかし、戦後はアメリカの構造言語学に基礎をおく新教授法, Oral Approach がミンガン学派 (Fries, Pike, Lado ら) を中心として、わが国に導入されるようになり、Oral Method はそのかげをひそめたことは否定できない。その一因として、わが国の英語教育界の関心が Oral Method の実践、改善に傾注して、この方法論を生み出した Palmer の言語理論、言語観の探究に欠ける所があったとも言えよう*。Palmer は 19 世紀末から 20 世紀にかけての現代言語学の創始者とも言うべき、Sweet, Jespersen, Saussure らから強い影響を受け、また当時 Translation Method にとってかわるほどの革命的運動とみられた Direct Method にも深い関心をもった。われわれは Oral Method の完成者としての Palmer の言語理論、方法論の中に、これら 3 者——現代言語学、Direct Method および Translation Method——についての深い考察および彼の統合的努力のあとをうかがうことができる。

この小論の目的は彼の新教授法の基底をなすとみられる言語原理のいくつかを取り出し、説明を加えることによって、彼の言語観の全体像を抽出することである。その一助として Chomsky の変形文法との比較を試みたのは、両者間にいくつかの原理的共通点、対照点があると考えたからである。なお、4 項目にわたり対立的 2 分法 (dichotomy) を採ったのは、この形式が言語の内奥に迫ることのできる有力なアプローチの 1 つであり、両極の中間にすべての真理を見出そうとする Saussure 流の考え方に従ったまでである。また引用文はできるだけ自由訳としてある。

自然能力 vs. 学習能力

言語習得の 4 技能, speaking, hearing (understanding), reading, writing の中で、Palmer は前者 2 つをとくに重視する。それは人類および個人の発達史の中で最初に習得される技術であるというだけではない。後者 2 つは文化史的にはより高次で、知性を要する (その点から、前者は野蛮 (barbarous) でさえある)。それにもかかわらず speaking, hearing を重視するのは、

それらが reading, writing の基礎をなし、後者が人工的な努力の成果であるのに対して、前者は自然にすべての人に具足した普遍的な能力であるとみるからである。

Palmer は言語習得の典型をいつも幼児の言語活動に求めるが、彼によれば幼児は限られた時間内に、まわりから取得した限られた言語資料にもとづいて speaking および hearing の技術を習得してしまう。Palmer は幼児のもつこの言語能力を「自然能力」(spontaneous capacities) とし、reading, writing を「学習能力」(studial capacities) として区別する¹⁾。Palmer の用語によれば、自然能力によって言語は“assimilate” (同化) され、学習能力によって“learn” (習得) されることになる。

Palmer が speaking, hearing に言及するときは、並列的な 4 つの経験的技能の中の 2 つを意味するだけでなく、それらの背後に働く言語使用の一般的能力をも含んで、これに自然能力の名称を与えていることが注目される。イギリスの幼児は I go always there と I always go there とを聞いたとき、たちどころに前者を不適格文、後者を適格文と判断するが、これは自然能力による。彼らは学校で副詞と動詞との位置関係、always のように時を示し、かつ動詞の前にくる副詞、およびこの副詞の用法に 23 個の例外のあること、それらがどういう場合かなどについて教わったことはないが、すでにその使い分けを心得ている。また自然能力は母国語を習得する幼児だけの独占ではなく、外国語を学習する大人にも具備されているとみる。大人の場合は、ただ潜在する (latent) だけで、学習過程において始めて顕在化するものであるとしている。

学習能力としての reading, writing の特徴は speaking, hearing の「転換」(conversion)²⁾ であるといえる。後者の本体の音声を自然的とするならば、その表記である「つづり字」(spelling) と音声との関連はきわめて恣意的 (arbitrary) である。われわれは [bɒt], [bɔ:t] の発音表記をつづり字化した、boat, bought をひとつひとつ覚えるしかない。この転換時 (学習時) には最大の正確度が要求される。

言語を文化的にみるならば、この正字法を始め、日用語に対する文語、詩語、雅語、古語、公式語など、その種類は多様であり、また文体論、創作法にも関係する。言語教育上、生徒の誤用矯正のためには自然能力にまかせておくことはできず、生徒の学習能力を最高度に活用しなければならない。

先に、speaking, hearing はわれわれの経験的活動であるだけでなく、reading, writing の基底にも働いていること、すなわちこの 2 組の技能の間には心的関連性があることに言及したが、この適例として Palmer は次のように言っている。

この両者間の関連性についての面白い実例は、われわれが 2 つの語句、文のどちらが自分の考えていることを表わすのに適当なのか、正常なのか決めかねているとき、われわれは心の中で、ときには口に出して発音して (articulate) みることである。その結果、よりよい方の心的な聴覚映像 (acoustic image) によって、どちらをとり、どちらをすてるかを定める。教師はよくこの方法によって、生徒の作文の誤りを訂正する³⁾。

Palmer は上述したように、reading, writing の文化的意義、およびその学習能力としての重要性をみとめているが、上例から明らかなように、基底的自然能力をもつ speaking, hearing をより上位レベルの、異質的なものとみとめている。

Chomsky は speaker, hearer の関係を Palmer のように経験的視点から出発して分析、記述するのではなく、先ず観念的な (ideal) speaker-hearer の合体を設定し、この抽象レベルにおいてのみ可能な言語能力 (competence) とその具体的、制限的レベルにおける言語運用

(performance)⁴⁾とをみとめ、この枠組みにもとづいて彼の統語論の展開をこころみている。Palmer と Chomsky との、この点における異同の比較は興味ある1つの課題であろう。

標準プログラム vs. 誤用矯正法

Palmer は外国語教育法のより効率化、簡易化のためには、実際の教授法の向上、改善だけでなく、より広い視点から言語学的原理にもとづく重点的教育計画、すなわち標準プログラム (standard programme) の考案が緊要であることを力説した。その内容は教育期間の長短によって異なるいくつかの教育計画の作成、教育内容の重点化、教授法に適したテキストの編集などである。そのためには言語学者だけでなく、心理学者、教育学者の協力による、科学的プログラムの作成が望まれる。すでに音声面においては、各国の音声学者の共同研究の結果、国際音標文字 (International Phonetic Alphabet) の制定、音韻論の活用、専門用語の統一などプログラム化の促進に大いに役立っているが、より重要な文法、意味の分野では、まだ見るべき作業成果があがっていない。

Palmer は現時点における外国語教育プログラムの作成のための原理として次の9項目を考えている。

- (1) 入門期の準備 (教師はとくに入門期において、適切な教授法、練習法によって生徒の自然能力を喚起し、発展させるよう努力すべきである。それによって、生徒の以後の学習向上のための正しい準備がととのうからである)
- (2) 習慣形成 (言語習得の基盤は習慣形成である。教師は生徒の既成習慣の活用を促すだけでなく、生徒に課せられる未知の課題に即応できるよう、新しい習慣の習得、形成につとめなければならない)
- (3) 正確度 (不正確な言語習慣をつけるおそれのあるような課題は一切与えてはならない。そのような習慣は悪癖となりやすい)
- (4) 漸進性 (教師は生徒が「既知から未知へ」 (from the known to the unknown) と容易に移行できるよう指導すべきである。各段階は次段階への準備であり、こうして恒常的進度が維持できる)
- (5) 均衡性 (言語の4領域および言語学の各部門 (音声学、正字法、語源学、統語論、意味論) に均等な注意が払われるようにつとめるべきである)
- (6) 具体性 (生徒は具体性から抽象性へと進行すべきであり、その結果、精選された、豊富な文例を身につけることができる)
- (7) 興味 (教室では生徒の興味がつねに持続できるよう、教授法を工夫しなければならない。興味なくして生徒の進歩はない)
- (8) 授業の進め方 (生徒はまず、音声の正しい聞き方、正しい発音法を教わり、文の使い方、作り方を教わり、それから単語の屈折法、派生法を学ぶ)
- (9) 教授法の多用 (言語は同時に多方面から、多様な方法で多様な作業によって習得される)⁵⁾

実際のプログラム作成にあたっては、上述の9原理をいかに関連づけ、いかに組み合わせるかが問題となる。たとえば、(3) (正確度) の徹底は(7) (興味) の持続と相反することにもなり、(1) (入門期の準備) は(5) (均衡性) と合致しないし、また(6) (具体性) は(7) (興味) を助長するが、両者とも(2) (習慣形成) とは適合しにくい。また、注目すべきことは、9原理の関連化について、Palmer はこれらの基底原理というべきものを模索していることであり、これが次節で述べる生成原理

である。

この節の終りに言及しておきたいのは、Palmer の標準プログラム作成の目的、構想の中にすでに、現代の文法観と相通じる点があることである。

一般に、完全性すなわち誤用 (error) の皆無とは誤用原因の漸次的排除によると考えられているが、すべての誤用は教師の教授法の欠陥に帰せられる。われわれは、このような欠陥的教授法を容認できない。たとえば、不定詞を過去形と同一視したり、複数形であるべき所に単数形を使ったり、代名詞の場合、格変化なしにいつも主格ですませるような誤法である。この点に関して、われわれは一般用の標準プログラムと特定用の誤用矯正法 (special corrective course) とを区別すべきである。(下線は筆者)、後者は欠陥的教授法によって生じた誤用の原因排除を目的としているが、前者は正用法を習得させ、正用法だけを習得させる教育法である(下線は筆者)⁶⁾。

誤用矯正法が学習者が実際におかした誤用、誤法の事後の救済法であるのに対して、標準プログラムは誤用発生の事前の予防法であり、この点から後者は Chomsky の言う「文法的文はすべて生成し、非文法的文は1つも生成しない」⁷⁾ 理想的な文法の作成と共通する所があり、Palmer はそのような理想的プログラムの作成を目指しているといえよう。もちろん彼のプログラムは、Chomsky が具現した変形文法に比べるならば方法論的に、遠くかけ離れており、その骨格を9原理として示したにすぎないが、今から半世紀以前に、すでにこのような構想が存在したことは注目に値する。

基本文 vs. 派生文

Palmer によれば、すべての言語資料は丸ごと記憶されるもの (memorized matter) と既に記憶された細小単位から構成されるもの (constructed matter) とに二分される⁸⁾。前者の例としては cat, book, desk, yes, no から始まって、Very well, All right, さらには I don't know, Just come here, How do you do? などをあげることができる。後者の例として、I saw Henry Siddings between six and half-past at the corner of Rithington Lane がある。これが記憶された文でなく、新たに構成された文であることは Siddings という苗字はきわめて珍しいし、Rithington という町名も殆んど人の記憶にないことから明らかである。実際の言語活動は大部分が、このような構成文ということになる。

では、記憶文と構成文とはいかに関連するのか、ある構成文はいかなる記憶文から作られるのが問題となる。この問題の考察のため Palmer は(例によって) 幼児の言語習得過程の観察から始める。ある幼児が Where are you going? という一文を丸ごと覚える。彼はこれしか知らないから、場面的に適切な場合(たとえば、パパの出勤時)以外では、この表現は通用しない。しかし幼児はこの記憶文が一つの基本文 (basic sentence)⁹⁾であることを感得する。これは言語生成への転機となる。すなわち、彼は are のかわりに were が使えることがわかり、もとの基本文から Where were you going? の派生文 (derivative sentence) を生成する。この代入または置換の可能性は拡大し、Where のかわりに When, going のかわりに coming, you のかわりに they がつぎつぎ使用されるようになり、派生文の数は激増して行く。幼児は自分が耳と口を通して記憶した、本物の (authentic) 基本文でなく、自由に組立てた派生文でも結構、相手に通じ社会に通用することを発見する。彼の冒険心はさらにつのり、you, they の位置に Papa, Mummy, he を使って、たとえば Where are Papa going? を作る。しかし、この時点において彼の冒険は停止または修正を要するようになる。幼児は基本文に内蔵されている文法性、制限

性までは感知していなかったのである。以上、幼児の生成した文例を表示してみる。

Where When	are were	you they	going coming
		*Papa *Mummy *he	

*印は不適格を示す。

これは一般に置換表 (substitution table) と称せられるもので、この表から基本文 Where are you going? から代入または置換によって生成される派生文の数は $2 \times 2 \times 2 \times 2 = 16$ 個 (より正確には基本文を除いて 15 個) となり、幼児の計算では $2 \times 2 \times 5 \times 2 = 40$ 個 (または 39 個) ということになろう。Palmer: *A Grammar of Spoken English* (1924) はもっぱら、この置換にもとづいて、ほとんど無限的に生成される派生文の中から、範疇 (category) 違反 (例えば Papa, Mummy, he など) を含む派生文を排除した所の文法の確立をめざしている¹⁰⁾。

Palmer は置換とならんで、もう 1 つの生成法を提示する。たとえば、次のような 3 つの異った文型グループ、A,B,C がある。

A グループ	B グループ	C グループ
You are going to the station	Are you going to the station?	Where are you going?
You are reading a book	Are you reading a book?	Where are you reading?
You are writing a letter	Are you writing a letter?	Where are you writing?
You are standing on the floor	Are you standing on the floor?	Where are you standing?

教師は A の中の基本文、You are going to the station および B の中の、その派生文 Are you going to the station? を発音し、以下同様に You are reading a book → Are you reading a book?, You are writing a letter → Are you writing a letter?, You are standing on the floor → Are you standing on the floor? を反復発音する。生徒は A の中の基本文は記憶しているから、これに基いて教師の示す B の中の新しい派生文を理解し、発音する。置換が同一文型内において基本文から派生文を作る方法であるのに対して、2 つの異った文型間において基本文から派生文を作るこの方法を Palmer は転換¹¹⁾ (既出 p. 2 参照) と称している。2 文間に文型的転換が行われるからである。教師は同様な転換を B と C との間においても行い、生徒はこれを習得する。

Palmer は置換、転換を一括して「類推による作文」(composition by analogy)¹²⁾ という同一枠組みに入れているが、これは両者とも文型の活用すなわち類推によるものであり、転換は置換の一部とみている。上掲の Where are (were) you going? が置換でも、転換でも処理できることは、われわれがみてきた通りである。Palmer は転換の例として、上述した基本文からの疑問文の生成のほか、基本形 (文) から (1) 3 人称単数動詞 (2) 過去形 (3) 否定形 (4) 使役形 (5) 受動態 (6) 複数動詞への転換例をあげており、(5) の例としては、次のようなものがある。

I write the letter	→	The letter is written
I read the book	→	The book is read

I know the answer	→	The answer is known
etc.	→	etc. ¹³⁾

Palmer は、このように置換と転換を同等視しているが、派生文の生成力では、前者の方がはるかに大きい(より無限的)とみている。しかし Chomsky は同一文型内の置換と異文型間の転換とを峻別し、後者の生成力を重視していることは周知の通りである。Chomsky は基本文→派生文(すなわち基本文)→派生文(すなわち基本文)→派生文の循環的(recursive)過程における生成力の無限性を重視するのである。同一の言語現象についての Palmer と Chomsky との焦点の相違が「類推」と「変形」(transformation)として具現したとも言えよう(Hockett も Palmer 同様、上掲の能動態→受動態の例文を類推とみている)¹⁴⁾。したがって Palmer の(置換 vs. 転換)の依存関係と Chomsky の(句構造 vs. 変形構造)の依存関係には注目すべき共通点がうかがわれる。

Translation Method vs. Direct Method

Palmer は 19 世紀末から 20 世紀にかけての現代言語学の発達にともない、それがいかに言語教育に影響したかについて、次の 3 点に要約する。

- (1) 音声理論および音声表記法の活用による音声教育の合理的組織的研究の進歩(既述 p. 3)
- (2) 言語の本質的機能としての伝達(communication)の強調
- (3) 母国語の習得法にもとづく外国語学習法の発達¹⁵⁾

とくに(3)については、伝統的な言語教授法が外国語をもっぱら外国語として教えることに終始してきたのに対して、新しい言語学の発達の結果、母国語の習得原理を外国語教育に応用することによって、今までにない新視界が展開し、新しい教授法の誕生となった。その典型が Direct Method である。その特徴は、母国語の習得過程に行われる語(文)とその意味との直結(immediate association)の原理、技術を外国語学習にも最高度に活用しようとするもので、この方法は外国語の意味把握の確認のために学習者の母国語を利用する Indirect Method すなわち Translation Method と対立する。両者間の論争は現代まで続行しているとみるべきだが、ここでは Palmer の立場を略述してみる。

一般に 1 つの言語内、2 つの言語間を問わず、語(文)意を確認し(identify)、表示する(demonstrate)方法には次の 4 つしかなく、それらは言語教育に活用されている。

- (1) 直結法(実在物、図示物、動作、資質、関係位置を生徒の眼前で表示する。Direct Method の核心をなす)
- (2) 翻訳法(意味の確認のため生徒の熟知する母国語を活用する。(1)とは異った意味で直接的)
- (3) 定義(同義語、パラフレーズなどの活用。表現用語の正確さが要求される)
- (4) 文脈(語(文)意の理解を助けるため、それを含む文例を活用する方法)¹⁶⁾

たとえば、London という語の意味を日本の中学生に伝達するには、London=ロンドン(2)が一番やさしい(もちろん、生徒の世界地理の知識を前提とするが)。London is the capital of England は(3)、さらに(a) the immense agglomeration called London, (b) the seat of the British Government (c) situated near the mouth of the Thames などで示すのは(4)。もっとも、地図上で、その地点を指示すれば(1)だが、desk, chair, book, teacher などの語とちがひ、この場合

は、その指示動作が他の意味とも直結しやすい。

Palmer は Direct Method に対する Translation Method の特徴を次のように述べている。まず、翻訳を含む、われわれの言語活動の分析から始める。われわれは一般に外国語の原語と母国語の訳語との意味の同等性 (equivalence) を信奉しているが、双方とも時とともにたえず変化していることは身近な母国語を観察すれば明らかである (1 例として、日本語の「全然」は現在では「全然よい」と肯定にも使うようだが、以前は「全然よくない」ともっばら否定に)。したがって、厳密には、適切な訳語と言っても近似値的にすぎない。定義は訳語にかわりうるが、その多用はかえって伝達のさまたげになる。また、われわれの日常生活では、少なくとも定義的正確さを欠いた語 (文) 意が通用しており、むしろその方が伝達が円滑に行われる (ときに、これが誤解の原因となるが)。このような言語活動の実態をみると、Direct Method が要求するように、すべての語 (文) と意味または指示物 (referent) との直結を求めることは、実際には不可能である。この点、Translation Method は、その近似値性にもかかわらず、すべての場合の意味確認、伝達に適用できる実用的価値をもっているといえる。

われわれは、外国語学習において、翻訳によって原語の意味を知るだけでなく、熟知している母国語の訳語との直結によって、無意識のうちにその意味を固定化し、定着化している。この固定化は意味理解の安心感ともなり、さらに新しい文の生成のための知識ともなる。Palmer は Translation Method の効用として (1) 生徒にある言語単位の意味を知らせる (inform) こと (2) (反復練習によって) 生徒に言語単位とその意味との間に完全な結合を形成することとしている¹⁷⁾。

外国語学習における Translation Method のもう 1 つの特徴を加えることにする。それは翻訳によって、われわれは外国語、母国語のもつ特性にふれることができることである。たとえば、フランス語を学習中のイギリスの子供は、Je suis ici depuis quinze jours = I have been here a fortnight の相当文において (Je) suis = (I) am の部分の比較から、母国語の英語では have been が使われる所を仏語では suis (すなわち英語の am に相当) ですますこと、母国語どおりに J'ai été [=have been] ici depuis quinze jours のように作文しては誤用であることを学ぶのである。日本にいるイギリス人に「始めてお目にかかります」を Beginningly honourable eye to hang と通訳したのでは、青い眼をさぞかしくくるすることだろう。各言語 (すなわち言語一般) がもっているこのような特性、恣意性 (arbitrariness) に気付かせてくれるのが Translation Method であり、これは Direct Method の守備範囲ではない。以上、Translation Method を主体として Palmer の考え方を述べてきたが、その学究的な (academic) 比較論は別として、言語教育の現場では、この 2 つの対立的教授法を、そのときどきの目的に合わせて、いかに有効に使い分けるかが問題であり、この点が折衷主義者 (eclectic) としての Palmer の力説する所である。

む す び

Palmer の言語研究法と Chomsky のそれを比べてみると、次の共通点がある。ともに簡易化、効率化を求めており、双方ともこの点、実用的である。もちろん、目的はちがう、前者は言語教育のため、後者は言語記述のための簡易化である。Palmer の言語教育プログラム作成のための 9 つの基準原理の確立はその 1 例である。これらの原理の活用によって、より有効な標準プログラムの作成をめざしている。注目すべきことは、彼がもう 1 つ、第 10 原理として、現代用語で言うところの「生成原理」を加えていることであり、「これによって既述の 9 原理はすべて

これに還元されるだろう」¹⁸⁾とやっている。Palmer にとっては、言語分析と言語教育が、本論で述べてきた所から明らかなように、ときに混用され、混同されており、これが彼の論旨をわかりにくいものにするところがある。しかし、反面その総合的考察によってわれわれは言語の表層だけでなく、その内奥をものぞかせてもらうことができる。

Chomsky は変形文法の発達の原点の 1 つを能動態 vs. 受動態の分析処理においているが¹⁹⁾ そのため、まず句構造の徹底的分析をこころみる。その分析成果を能動態 vs. 受動態の考察に活用しようとして思はぬ繁雑さに苦しむことになる。この繁雑さからの脱皮すなわち簡易化の方法を彼は語順転換の事実に発見する。これによって句構造における 2 つの文型を 1 回で処理できるからである。簡易化を原点とする Chomsky の変形文法が、今迄の言語研究によっては見落されてきた、言語の暗部すなわち深奥をわれわれの眼前に明示してみせてくれたことは言うまでもないことである。Palmer と Chomsky の (分析+簡易化) の言語研究法がもつ魅力はここにある。この特性は客観的「分析」のみに終始した構造言語学の方法論と比べたとき、より鮮明になるであろう。

注

- 1) Palmer, H.E.: *The principles of language-study*, 4, 9, Oxford University Press (1921, 1974)
 - 2) *ibid.* 17
 - 3) Palmer, H.E.: *The problem of English-teaching in the light of a new theory: a memorandum*, 337; S. Ichikawa (ed.) *The dictionary of English-teaching* Kaitakusha (1962, 1981)
 - 4) Chomsky, N.: *Aspects of the theory of syntax*, 4, MIT Press (1965)
 - 5) Palmer (1974) 37-39
 - 6) Palmer, H.E.: *The scientific study and teaching of languages*, 81, Oxford University Press (1917, 1968)
 - 7) Chomsky, N.: *Syntactic structures*, 13 Mouton (1957, 1963)
 - 8) Palmer (1974) 116~117
 - 9) Palmer, H.E.: *The five speech-learning habits*, 45~50 Kaitakusha (1938, 1980)
 - 10) Palmer, H.E.: *A grammar of spoken English*, xxx~xxxiii Heffer & Sons (1925, 1950)
 - 11) Palmer (1974) 122
 - 12) Palmer (1980) 50
 - 13) *ibid.* 59
 - 14) Hockett, C.F.: *The view from language*, 253 University of Georgia Press (1977)
 - 15) Palmer (1974) 124~125
 - 16) Bloomfield, L.: *Language*, 140, Allen & Unwin (1933, 1979), Palmer (1968) 49, Palmer (1974) 84
 - 17) Palmer (1968) 81
 - 18) Palmer (1974) 116
 - 19) Chomsky (1963) 42~43
- * Ito, K.: "Harold E. Palmer" 45, *English linguistics and teaching of English*; Ota A. (ed.) *English linguistics*. Vol.12 Taishukan (1982)